1993年1月8日発行（毎月1回1日発行）昭和62年8月10日第三種郵便物認可　第97号　ISSN　0285-1458

MY-SELF

金沢港

No.135

〈1993年1月〉

眼科医会風土記

――徳島県――

三歳児健診など地道な地域医療活動に成果

――〝銀海〟の多くのパイオニアを輩出した伝統の土壌で――

◆はじめに

徳島県は四国の東側を占め、人口約八十三万、中央部に四国最長の吉野川、南に那賀川と豊富な水と緑に恵まれた自然豊かな土地である。反面、高速道路はまだかけらもない後進県でもある。空路で東京から一時間、大阪から二十五分の位置にある。五年後には世界最長の吊り橋が明石海峡を跨ぎ、淡路島を経て、既設の鳴門の渦を見下ろす鳴門大橋と共に、徳島は本州と結ばれることになっている。

◆阿波・徳島の歴史

古事記によれば、イザナギ・イザナミの尊が、まず淡路島を、次いで四国を生み、「四国は身一つにして四つの面あり」と言い、阿波は大宣都比売（オオゲツヒメ）と名付けた。大宣とは大食で食物豊かな土地という意味である。古代では貝塚は瀬戸内と共通性を持ち、銅鐸が多く出土している。

五・六世紀には粟国・長国あり、大化改新で併合された。徳島市国府町に国司庁を置き、国分寺と国分尼寺を建てた。当時六十の荘園があり、京都、奈良の大寺院や皇室領であった。十一世紀に末法思想が現われ年号入りの経筒も出土している。

一一七七年、鹿ケ谷の変で謀反に参加した阿波の在庁官人・藤原西光が清盛に殺された。

源義経は一一八五年、嵐を押して摂津を出て、小松島付近に上陸し屋島を陥れ、平家一門の田口成良は源氏に鞍替えした。

阿波は源氏の支配となり、佐々木経高が初代守護となった。経高は後鳥羽上皇と倒幕を謀り、幕府は信州の小笠原長清に阿波を平定させ、長清は平定後、弟・長房を阿波の守護として、自分は信濃に帰った。この小笠原は今も礼方・弓道の本家として残っている。

足利尊氏は一三三六年、九州へ敗走する時、細川和氏を阿波へ遣わした。和氏は四国の兵力を結集して、やがて楠木正成を湊川に破った。この頃、阿波山岳武士は南朝について戦った。和氏の弟・頼之は管領となり、弟を阿波、讃岐の守護職とした。

一三六七年より下克上した三好、松永をいれて一五六八年、松永久秀が信貴山で織田信長に降伏するまで二〇〇年間、京都は阿波が支配していた。応仁記にある「汝や知る都は野辺の夕雲雀あがるをみてもおちる涙は」は阿波麻植郡の名筆・飯尾常房の作である。

やがて阿波は長曽我部元親に占領され、さらに豊臣秀吉に平定されて、蜂須賀家政が領主となった。関ヶ原

▲マリーナから眉山を望む

の戦では徳川方につき、大坂冬・夏の陣の功により、淡路を加増され、稲田氏を城代とした。幕末では藩主・斎裕が幕府寄りであったが、淡路家士は尊皇討幕に参加した。明治に入り東征軍に加わり、廃藩置県の時、淡路は分藩を企て、本藩藩士は稲田方を襲撃した。太政官は襲撃派の新居水竹以下十名に日本刑法史上最後の切腹刑を命じ、稲田家臣たちは北海道移住を命ぜられた。一八八〇年に徳島県が置かれた。

◆徳島の名物

阿波踊り　毎年八月に四日間ある。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損損」は、あまりにも有名。起源はさだかでないが一八〇〇年初めに急に盛んになった。

四国遍路　八十八ヶ所が決定したのは一七〇〇年頃、笠に「同行二人」と書き、弘法大師と一緒に巡礼していることを意味している。南無大師遍照金剛（空海が潅頂した時の名）を唱えて歩き、白木の杖は梵語を書いて、何処で弊れても卒塔婆がわりになった。沿道の人たちは湯茶、米、芋などでお遍路さんを接待し、自分も巡礼の功徳があるとされた。現在はバスや車で巡る人が多い。昭和初期には青年団男女が一緒に巡り楽しいハイキングでもあったようだ。金剛流のご詠歌は阿波郡出身の曽我部俊雄が作った。

阿波藍　十七世紀末より発展した。藍作は重労働と魚肥を主とした金肥を要し、やがて藍師や藍商の特権階級をつくり、藍作人は困窮し、一揆や逃散がおこった。盛況を極めた藍も、のち化学染料に圧迫されて、今は民芸的に珍重されている。

鳴門わかめ　潮流の激しい鳴門で産し、腰の強さと味は抜群である。

鳴門金時　現今、味のよさでは日本一の甘藷。里浦町のを最高とする。甘藷は一八七二年、里浦の国蔵という人が「元気」「あいのこ」という優れた品種を発見している。

地域社会に対する奉仕と眼科経済基盤の確立

徳島県眼科医会
会長　鎌田（かまた）　一（かずいち）

過去三十年に及ぶ福島前会長のあとをつぎ、四月に会長に就任してからも、今までの路線を踏襲し、会員諸先生がたの総意を踏まえ、誤りなく即応できるような会でありたいと願っている。

今まで眼科医は経済的に恵まれていたといわれるのは、その数が少なかったためにほかならない。健保の一件あたり平均点数は最低である。

現今、大学入局者は飛躍的に増加し、眼科医師過剰時代の到来は目前である。一般中小規模開業医の、日常、使用する頻度の多い項目は、期待した点数アップにならず低く抑えられ、比較的多い患者数による診察料のアップによって支えられている。

従業員の労働条件は、ますます厳しくなるだろう。現在、恵まれているからといって安易に考えていてはいけない。やがて苦しい時代が来るだろう。

高齢化社会の急速な到来で、病院や老健施設に収容されず、家庭にいる「寝たきり老人」、あるいは、それに近い老人で眼科治療を要する人がかなり多くいる。日常の外来診療に追われ、つい忘れがちであるが、家庭を訪れての治療も必要がある。

その他、諸々の検診業務（三歳児健診、老人検診、学校医、産業医、救急医療活動など）に積極的に参加し眼科医の守備範囲を拡大しておかねばならない。屈折・矯正視力検査の分野では、われわれ眼科医の領域が狭められようとしている。明治以来、これらの検査は眼科医がするものであるという啓蒙活動が十分行なわれてこなかったのは残念である。現在、各方面で眼科専門医として活動範囲を広め、地域社会に積極的に奉仕し、将来の道を広く開けておかねばならない。

阿波三盆糖　一七九二年作出。今も高級和菓子の材料として有名。

すだち　ライムに似た柑橘。格別の風味があって喜ばれる。

その他

平島公方　一五四三年、細川持隆は将軍・足利義冬を阿波に迎え那賀郡平島に館を設けた。

テグス　江戸初期、堂の浦の漁師が道修町の荷物包装紐で発見、魚釣りに用いて売り出した。

三木ポーロ　二十六聖人殉難者の一人。阿波の人。一五九七年、三十三歳で没す。

第一次大戦のドイツ人捕虜　板東収容所でベートウベンの交響曲第五・第九、セビリアの理髪師・ハンガリヤ舞曲などを日本で初演奏した。石造のアーチ橋を残している。

モラエス　ポルトガルの人。阿波女と結婚し多くの著作を残し、徳島市で没す。

◆徳島県眼科医会の歩み

藩制時代の一八〇〇年初期、興津春岱、袖岡秀由の二藩医は眼科に秀で、代々医家を継いでいた。三井魯庵は「眼科小全」を著し、高錦国は一二九七年、眼科医として秀で、養子がシーボルトについて西洋医学、特に眼科学を修めて有名な高良斎である。高川原市楽には盛玄輔がいた。

板野郡矢武の井上肇堂は漢方のほかに華岡青州、奥劣斎についても研鑽し、一八六一年に藩医となり、その四男が神田の井上眼科病院を開いた井上達也で、診療のかたわら数多の眼科医を養成し、明治三十三年の同病院同窓会誌には、会員数二三八名あり、四名の徳島県人の名がある。

第二次大戦前には徳島市に十三、市以外の各地に十一の眼科医院があった。大学教授として銀海に大きな足跡を残した人に盛新之助、馬詰嘉吉、宇山安夫があり、現在、宇山昌延、大鳥利文の二教授が活躍されている。

徳島県眼科医会は昭和八年に住友次郎が会長となって誕生し、中四国眼科集談会を開催した。中国四国眼科学会の前身である。

昭和十八年、徳島医学専門学校が置かれ、翌十九年に福島義一教授が招かれたが、昭和二十年の空襲で徳島市は壊滅した。昭和二十二年、歩兵第四十三連隊跡の現在地へ移り、昭和二十三年には徳島眼科集談会が開かれるまでに復興した。この集談会は現在も続いている。

日本眼科医会創設により徳島県支部として傘下に入った。福島義一支部長、森勝三郎代議員、古屋純一予備代議員として出発した。日本眼科医会の下に中四国ブロックが結成され、幹事・森勝三郎、健保・盛重知、国保・鎌田一一を代表として参加した。

四国眼科学会は昭和二十六年、徳

●徳島県眼科医会歴代会長

初代会長	住友次郎	（昭和８年　～　不詳）
二代会長	井上東周	（昭和23年４月　～昭和31年４月20日）
三代会長	山田金吾	（昭和31年４月21日～昭和35年３月19日）
四代会長	布村晴雄	（昭和35年３月20日～昭和37年８月２日）
五代会長	福島義一	（昭和37年８月３日～平成４年３月31日）
六代会長	鎌田一一	（平成４年４月１日～　）

徳島県眼科医会役員　1992.10.6 現在

会長	鎌田一一（日眼医支部長・国保審査委員・予備代議員）
副会長	藤江　渡（庶務・コンタクトレンズ・眼鏡店対策）
	盛　重知（会計・健保審査委員）
理事	浜　博（日眼医代議員・コンタクトレンズ・眼鏡店対策）
	保科正之（学校保健）
	三木敏夫（健保審査委員・学会）
	布村　元（国保審査委員・OMA教育）
	笹野　敏（県南部代表）
	北室友也（日眼医勤務医部会）
	宮本博亘（渉外担当）
	産賀　学（勤務医代表）
	塩田　洋（徳島大学眼科教室代表）
監事	田中達也
顧問	三井幸彦
	三村康男
名誉会長	福島義一
名誉会員	森 勝三郎　古屋純一　山田繁子

会員数　A会員 35名　B会員 37名

▲目の愛護デー座談会風景

八㎜映画「徳島の眼科」は昭和四十二年、第三十回徳島眼科集談会で上映され好評を博した。盛、田中会員の労作による。現在、熟年に達した会員の若い姿を今にとどめ、眼科医会に永久保存されている。

「目の愛護デー」事業は、毎年、対談会を開き、講演会、健康相談には三〇〇名の市民が集まっている。

「三歳児健診」「OMA教育」も軌道にのり、着々と効果をあげている。

「徳島アイバンク」は、当時の会長・福島義一と徳島大学・三村康男教授の献身的な東奔西走の結果により、昭和五十九年に開設され、多くの県民に光を与えている。

「徳島県眼科医会ニュース」は毎月、徳島県医師会雑誌に掲載し、眼科医会の動きや健保問題、学会案内など時々の情報を流している。

文中、敬称は略した。詳細は福島義一著「阿波の医学史」「徳島県医師会史」を参照されたい。

島大学・水川孝教授のとき創立され、第1回を徳島大学医学部で開催した。以後、四国各県が持ち回りとなり、ときに中国四国眼科学会も併せて開催した。昭和四十九年には徳島大学・三井幸彦教授が会長となって、第二十八回日本臨床眼科学会が徳島市で盛大に開催された。

びーどろ

1991

レストランでワインを選ぶときには、かなり緊張するものです。食事の楽しみは、なによりも気の利いた会話ですが、その次には、ワインとお料理の内容がおなじ程度に大事だと思っているからです。

ところが、ズラリ並んだワインのリストを見せられても、それすべてを暗記しているわけではありません。「ど・れ・に・しようか」と、最初のページから最後のページまで何度も見て、結局は分からないというのが毎度のことです。

高ければ良いということでもありません。刑事コロンボの映画に、容疑者が有名なワイン愛好家なので、まず手始めにワインの勉強をはじめるシーンがあります。「なにが良いワインだか教えてくれ」と、友達のバーテンさんに聞きにいくのですが、返事は簡単で、「高いのが良いワインだ」というのです。

けれども、「料理一人分とワイン一本分とはおなじ価格帯で」という鉄則があります。むやみに高いワインを飲んでも楽しくはないのです。

個々の銘柄の名前は知らなくても、自分の好きな「地域」を決めておくことがお勧めです。フランスワインなら、ボルドーとか、ブルゴーニュといった地域のことです。

「何年もの」すなわちビンテージについても、すこし知っておくのがよろしいようです。これこそ気が狂うほど細かい評価が表になったものがありますが、こんなのは無視して、覚えておいて損がないのが、1988と91です。

遅霜のせいで、91年ものは全滅という情報が以前流れたのですが、それが夏以降の好天気で完全に持ち直しました。量は少ないけれども、91ならば、フランスでもドイツでも、まず無条件でOKなのです。

どうぞしっかり楽しんでください。

（ENO）